

「熱帯林業」新旧誌 41 年を振り返って

森 徳 典

私が編集責任者を努めて、早や7年(21号)が経過しました。当初はうまく原稿が集まるかと内心穏やかではありませんでしたが、幸いにも、これまでの本誌の立派な遺産と森林総研の研究者仲間、林野庁海外林業協力室の担当者の皆様に助けられて、何とかこれまで欠号もなく発刊し続けて、70号を迎えることができたことを、私としてもうれしく思っております。これもひとえに当方からの勝手な原稿依頼に対して、快く執筆していただいた多くの海外林業研究会の会員の皆様並びに海外林業に活躍されておられます皆様のおかげであると深く感謝いたしております。この機会に、本誌を借りて、私なりに「熱帯林業」誌新旧両シリーズの41年間の中の主な国際的な出来事(表1)と本誌の記事の動向について述べてみたいと思います。

戦後日本の林業ないし木材業界が熱帯林ないし熱帯木材に高い関心を持つようになった最初の契機は、戦後の経済復興に伴う木材需要の増加と1964年の外材輸入自由化にあったでしょう。その2年後の1966年には、熱帯林業協会が設立され、本誌の旧シリーズが発行されています。設立時の状況については、本号の緒方 健氏の報告に詳しいので省きますが、熱帯林の開発と熱帯木材の輸入は、1970年代まで急速に拡大しました。

他方、この時期は産業の急速な発展に伴う大気汚染や環境破壊問題が生じてきた時代でもあり、日本の環境庁の発足(1971)、スウェーデンにおける国連人間環境会議(1972)などが、それらへの初期対応例として挙げられます。この頃になると、経済復興した日本に対して途上国への技術協力が強く求められるようになり、熱帯農業研究センター(1970)や国際協力事業団(1974)等が発足しました。当時熱帯林の減少が新聞紙上などで話題になった最初の契機は、ローマクラブによる「成長の限界」であったと記憶しています。極めつきは1980年のアメリカ政府による「西暦2000年の地球」であります。これはその後

Tokunori Mori : Looking Back for 41 Years of "The Tropical Forestry"
(財)国際緑化推進センター

表 1 熱帯林業に関連の小史 (2000 年まで)

年	出 来 事
1964	木材輸入の自由化
1966	熱帯林業協会設立/「熱帯林業」旧シリーズ創刊
1972	スウェーデン国連人間環境会議 ローマクラブ「成長の限界」発表
1974	国際協力事業団 (JICA) 発足
1976	JICA 林業プロジェクト「バンタバンガン森林造成」開始 フィリピン 丸太輸出禁止
1978	海外林業コンサルタンツ協会 (JOFCA) 設立
1980	USA 政府「西暦 2000 年の地球」発表 FAO 熱帯林資源評価 (以後 10 年毎に世界森林資源評価) 熱帯材輸入量は 1970 年代に最大となり、80 年代に減少に転じる
1982	ナイロビ国連環境計画会議
1984	インドネシア 丸太輸出禁止 熱帯林業協会解散/「熱帯林業」旧シリーズ廃刊 「熱帯林業」新シリーズ創刊/JOFCA 支援開始
1985	熱帯林行動計画
1986	林野庁海外林業協力室設立 国際熱帯木材機関 (ITTO) 設立
1987	海外林業研究会発足
1991	国際緑化推進センター (JIFPRO) 設立 JIFPRO「熱帯林業」支援開始
1992	リオデジャネイロ国連環境開発会議
1997	国連気候変動枠組条約京都会議 (京都議定書)

の地球環境問題への国際的な取り組みの原点となった報告書であり、基本的には、この報告書の分析に沿って、現在の森林・林業に関わる国際協力があると言って過言でないと思います。

1970 年代には世界一の熱帯材輸入大国となっていたが、熱帯林減少を食い止めようという上記国際世論におされて、1980 年代には熱帯林材の輸出抑制と熱帯林の再生がより重視されるようになりました。このような状況下で、熱帯林の開発と南用材の輸入に関連する会社に基礎を持った熱帯林業協会は、その活動地盤を失って 1984 年には解散となりました。一方、途上国や国際社会からは、地球環境保全を重視した熱帯林の再生などの事業要請がますます強まり、それに対応するために、熱帯林業誌の新シリーズの発刊、林野庁の海外林業協

表2 新旧シリーズの掲載記事の比較

記事の内容	旧1~20号	新1~20号	新51~70号
	1966~'71	1984~'91	2001~'07
国別の森林林業林政紹介	35	43	26
うち熱帯地域の生活文化一般	18	0	0
うちJICAプロジェクト一般	0	8	5
生態、樹種、造林・育種関係	29	36	39
環境保全、土壌、防災関係	2	10	14
経営、測樹、社会林業、アグロ関係	4	13	25
経済、市場、流通	12	0	0
病虫獣害、保護関係	0	4	8
林産、木材利用関係	32	14	17
森林開発、運材、木材会社経営	18	0	0
国際協力、国際林政関係	6	17	12
計	138	137	142

注) ここでは、協会だより、研究会総会報告、講演会などお知らせ、海外情報(短
信)、会員の広場、コラム・随想、文献(図書)紹介等の記事及び熱帯林業連載
及び講座記事(表3)は除いている。

方室の創設、海外林業研究会の発足、さらには国際緑化推進センターの設立な
どの体制整備がなされてきました。そして国際的には、1992年の国連環境開発
会議等を通じて、生物多様性条約、砂漠化防止条約、森林原則声明、気候変動
枠組み条約などが採択され、その条約の下での森林管理、持続可能な林業経営、
住民の参加と生活安定などが今日では最重視される問題となってきました。

このような背景を受けて、熱帯林業誌の記事内容が時代と共にどのように変
化してきているかを知るために、旧シリーズの1~20号(1966~'71)、新シリー
ズの1~20号(1984~'91)及び最新の51~70号(2000~'07)の3時期に分け
て、記事内容を分類してみました(表2)。最初に目につくのは、熱帯林業協会
が設立された当初は、その目的から熱帯林の開発、木材の輸入、それを実施す
る在外日本企業の支援という立場の記事、すなわち森林開発・伐木運材、途上
国の経済・木材市場・流通、そして未知樹種の材質・木材利用などが、記事の
半数近くを占めていることであります。この種の記事は、現在ではほとんど影
を潜め、林産物利用にしても、特用林産物やアグロフォレストリー用特用林産
等に関する記事がほとんどです。また、各国の熱帯林などの紹介も、最初は熱

帯林の生態、樹種特性などに加え、地域の生活・風物の紹介にも詳しく、「世界不思議発見」的な記事がかなり多く見られます。このような傾向は、連載記事にも認められ、例えば「熱帯樹の知識」は主に木材利用の面から解説されています(表3)。また、「南方植物誌」「熱帯の果樹・作物」などは、花木などの珍しい樹種や作物・果物を紹介する記事となっています。熱帯林業協会の一つの大きな仕事であった熱帯地域で働く駐在員への支援として、医師による巡回診療の実施とともに、本誌の熱帯医学の解説は重宝されたと思われます。しかし、こうした在外民間企業向けの記事やサービスは熱帯林業協会の解散と共に姿を消し、新シリーズでは熱帯林業研究者や JICA の専門家等による報告が主体となってきました。

同じ国の森林・林業・林政の紹介記事でも、現在では、環境保全・地方分権・住民福祉の視点から森林の再生や住民参加による森林管理のあり方などについて解説されています。すなわち、リオデジャネイロの地球環境開発会議(1992)以降は、持続可能な森林経営や住民参加による森林経営が重視されるようになると共に、地球環境保全重視の立場からの国際協力に係わる話題が多くなってきています。また、同じ会議報告にしても、最初の頃は単純な国際会議出席報告であったが、今では協力事業の実施に必要な事項、例えば、CDM 植林プロジェクトなどの実施に必要な国際的な規約やルールなどの解説記事が充実してきています。さらに、最近重要性を増してきた違法伐採、モデル林経営、気候変動などの問題は、地球規模で解決すべき問題であるので、本誌は題名を「熱帯林業」としているが、内容的には国際林業あるいは海外林業という立場で、2000年以降は北方林・温帯林の問題も、取り上げることにしました。

新シリーズになってからは、講座内容も、熱帯の森林土壌、病虫害、樹種の造林特性など森林再生に関わりが深い事項が充実されてきました(表3)。また、社会林業への要望が多くみられたことから、アグロフォレストリーや住民参加による森林造成・管理を取り上げてきました。

執筆者についてみても、新シリーズの前半では、大学教官や研究者が圧倒的に多かったが、最近の号では、林業団体や民間企業の技術者からの原稿が増えてきています。例えば連載解説や講座記事の執筆者は、昔は大学教授や研究機関の研究者に限られていたが、社会林業講座では JICA プロジェクト等で活躍された林業技術者が執筆者の半数を占めました。大学院生による執筆も増加傾向にあり、熱帯地域を含め広く地球全域の森林・林業関係の仕事に従事する人の範囲が広がってきていることを反映しています。このように、森林を対象と

表 3 熱帯林業に関する連載あるいは講座記事の掲載回数と号数

講座の内容	回数	旧号数	主な著者
熱帯林の調査法	5	1~5	西沢正久 (訳)
熱帯樹の知識	70	3~72	緒方 健ほか
南方植物雑記	62	11~72	佐々木尚友
巡回診療関係	18	15~71	高野信夫ほか
やさしい熱帯医学	52	20~72	藤田紘一郎
気象	7	24~30	丸山栄三
熱帯果樹	12	32~12	岩佐俊吉
熱帯の街路樹	7	36~43	立花吉茂
多雨林の樹木の形態と生態	7	40~46	吉良竜夫
熱帯の森林型	8	52~59	吉良竜夫
熱帯の害虫	5	52~56	野淵 輝
熱帯作物点描 (果樹 9 回 23 種含む)	17	56~72	岩佐俊吉
熱帯樹種の造林特性	12	61~72	浅川澄彦ほか
新号数			
熱帯の有用材	28	1~29	緒方 健
熱帯土壌概説	15	1~15	有光一登
熱帯の苗木病害	10	1~10	小林享夫
熱帯の森林害虫	26	11~36	野淵 輝
熱帯医学の最近の話題	6	13~18	藤田紘一郎
熱帯の土壌 (第 II 部)	18	18~37	八木久義
熱帯樹種の造林特性	27	30~63	浅川澄彦ほか
熱帯地渡航におけるマラリア対策	5	34~38	田中真奈実
熱帯樹木の成分と利用	8	38~45	谷田貝光克ほか
社会林業	21	46~67	加藤 隆ほか
熱帯樹種の葉の生理特性	5	53~57	松本陽介
海外林木育種・遺伝資源	7	61~67	生方正俊ほか
熱帯果樹とその利用	>3	68~	米本仁巳
熱帯のカミキリ類	>1	70~	槇原 寛

する業務は、地理的には地球的な規模で、人的には林野庁・森林総研・大学を中心とした官から民間各種団体、企業、NGO へと幅広い分野に広がってきたといえます。

現在本誌の購読者は、海外林業研究会会員 316 名 (法人会員 7 含む)、会員外購読者 119 名で、合計 442 名である。その他寄贈本が 400 冊強あるので、毎月約 1,000 冊印刷している。1990 年頃の海外林業研究会の会員数は現在の 2 倍以

上であったが、日本の ODA の縮小と共に減少を続けてきました。今後民間企業や NGO 団体などの分野の記事をさらに充実させて、その分野の購読者数を上げられたらと考えています。

最後に個人的なことで恐縮ですが、私が本誌の編集に携わるようになった経緯をお話して、この稿を締めくくりたいと思います。一昔前の話ですが、長く研究公務員をやっても、社会に貢献できたと思えるような仕事の少なさに、一抹の寂しさを覚えていました。そんなときに机上の US Forest Service のパンフレットがあり、そこには「Tropical Silvics Series」の案内がありました。これを種本にして、熱帯林業誌に「熱帯樹種の造林特性」の記事を書いてみたらどうだろうかと思いつきました。早速このアイデアを当時熱帯林業編集委員長であった浅川澄彦氏にお話ししたところ、浅川氏からは「これまで本誌のシリーズで取り上げてきた樹種もかなりあるので、これらも含めて、国際緑化推進センターの研修用テキスト作りに協力してほしい」と申し込まれてしまいました。そうして出来上がったのが、「熱帯樹種の造林特性」全 3 巻であります。これがそもそも私と国際緑化推進センターの付き合いのはじめでありました。従って、国際緑化推進センターないし熱帯林業誌との関係が比較的浅かった私が、「熱帯林業」の編集を臆面もなく引き受けるのに、それほど抵抗感を持たなかったのは、このテキストの編集に携わって、編集作業というものに親しんだという経験があったからだと思います。

浅川澄彦さんは 1984 年に熱帯林業誌の新シリーズの発刊に多大の努力をされ、その後引き続き本誌編集委員長として、48 号の発刊まで、16 年間の長きにわたって本誌の編集発行にご尽力をされました。本誌旧シリーズにおける北野至亮氏と新シリーズの浅川澄彦氏の功績は多大であります。その浅川氏が、現在長い闘病生活を送っておられて、この記念号にご執筆いただけないのが、誠に残念であります。